富山県の中世前期の輸入陶磁器

越前　慎子（公益財団法人富山県文化振興財団）

はじめに

富山県の輸入陶磁器については、各遺跡で出土した輸入陶磁器と土器・国産陶器との量比を算出し、その結果から遺跡の性格を検討する中で主に研究が進められてきた（北陸中世土器研究会 1992 他）が、近年の大規模な発掘調査により資料も増加している。小稿では、中世前期の輸入陶磁器が一定量出土した遺跡を対象として[注1]、大宰府分類（太宰府市教委 2000）に則して再分類した上で個体数を比較し、平安時代末期から鎌倉時代頃の輸入陶磁器の出土傾向について検討した[注2]。

1　輸入陶磁器の数量と出土時期

分析対象とした輸入陶磁器の総数は 1,311 点である。遺跡別の数量としては、県南西部の梅原胡摩堂遺跡（304 点）が突出して多いが、県中央部の神通川流域に位置する任海宮田遺跡（209 点）・友杉遺跡（114 点）・中名遺跡群（107 点）も群を抜いている。輸入陶磁器の内訳については、富山県全体でみると中国製青磁が多く約 55％を占め、次いで中国製白磁が多く、中国製青白磁は 1 割に満たない。しかし、遺跡別にみると県全体の比率とは異なる遺跡も多く、白磁が青磁を上回る遺跡が県西部（中世においては射水郡・砺波郡）に偏るという特徴がある。

富山県内の遺跡で輸入陶磁器が一定量の出土をみるようになるのは大宰府編年 C 期以降で[注3]、F 期に至るまで多様な種類の中国製磁器が出土している。青磁・白磁・青白磁の出土量を時期別に比べると、越中では概ね 11 世紀後半～ 12 世紀前半に白磁を主とした中国製磁器がもたらされ、12 世紀後半から 13 世紀前半には青磁が盛行し、13 世紀後半～ 14 世紀前半になると青磁が減少して白磁の量が回復し同等の比率になるが、しかし総数は減少する（第 1 図）。大陸においては、宋代は中国の陶芸が最も隆盛した時代であり、特に北宋期には精緻で優美な青白磁や白磁がつくられ、南宋期には龍泉窯をはじめとして青磁が大量に生産されて東アジア各地への輸出がますます盛んになったとされる。また、元代になると、宋代に栄えた各地の窯の多くは衰退または滅亡したとされ（藤岡 1990）、断交状態にあったことも相俟って日本への輸出量が減少したものと考えられる。越中における輸入陶磁器の流通の変化は、このような宋代から元代にかけての大陸の窯業の盛衰の影響を反映していると捉えられる。

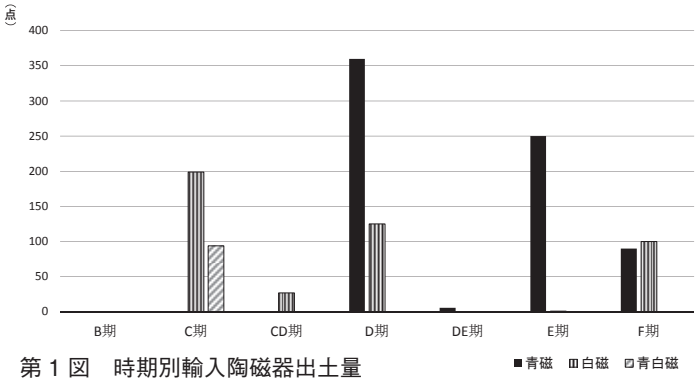
2　輸入陶磁器が出土する遺跡の特徴

各遺跡の時期別の出土傾向は、特殊な例を除くと、県西部（射水郡･砺波郡）に白磁の比率が高く C･D 期を中心とした古い時期を主体とする遺跡が集中し、中央部（婦負郡）には青磁が主体あるいは白磁をやや上回る程度で E・F 期を主体とする新しい時期の遺跡が多く、北東部（新川郡）には青磁の比率が高く県西部より若干遅れる D 期を中心とする遺跡が多い。

輸入陶磁器が多数出土する遺跡の多くは、水運に恵まれた場所に立地し、大溝に区画された大型の掘立柱建物群を中心とする集落跡で、文献史料に残る荘園に関連する可能性が高いとされている。越中国衙があった射水郡と、小矢部川の水運により国衙と結ばれる砺波郡には糸岡荘等の皇室領や石黒荘等の摂関家領が集中し、早くから開発が進んでいた。これに対し婦負郡・新川郡では幕府料所や幕府に所以のある寺社領が多く、南北朝期以降に初見される荘園が多い（深井他 2001）。輸入陶磁器の出土傾向は、このような荘園開発の動態と連動しており、交易に関わった在地領主層の盛衰を反映するものと考えられる。

輸入陶磁器の出土状況については、破損したため廃棄されたか、あるいは二次堆積によるもので元位置を留めないと考えられる溝・包含層等からの出土が大半を占めるが、意図的に埋納された例と

しては、円念寺山遺跡の経塚、中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の土壙墓がある。また、大量の土師器椀・皿による祭祀儀礼の跡とされる土器埋納土坑では、１点～数点の輸入陶磁器を伴う例が梅原胡摩堂遺跡・在房遺跡等にあるが、意図して埋納されたかは確証を得ない。



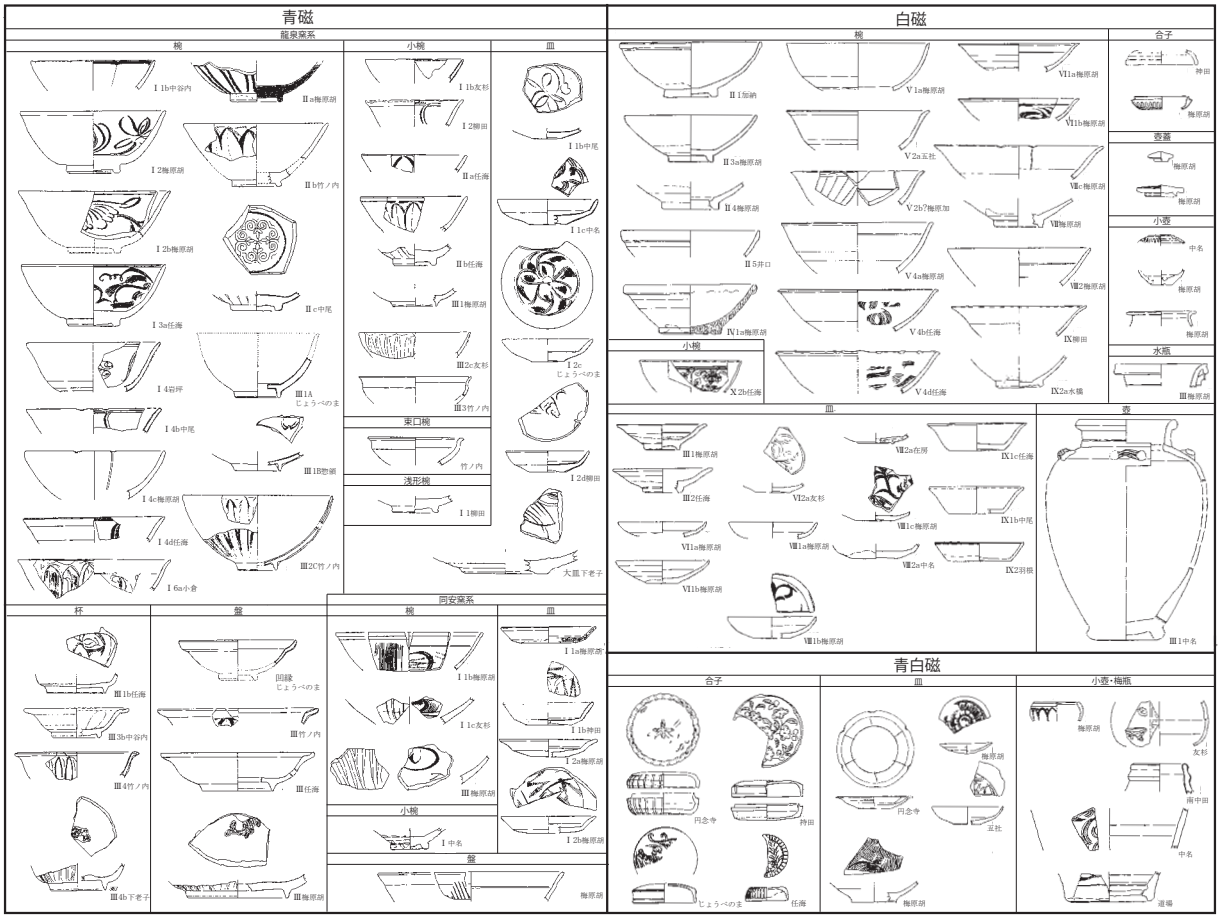
第１図　時期別輸入陶磁器出土量

※「CD 期」は陶磁器の細分類ができないことによる「C 期または D 期」の略。「DE 期」も同様。

注１　具体的には報告書に実測図が５点以上記載されている遺跡を対象とし、実測図をもとに分類を行った。
注２　紙幅の関係から数量データは割愛した。発表要旨・資料集を参照されたい。
注３　Ｂ期に溯る例としては、南太閤山Ⅰ遺跡から越州窯系青磁碗ⅠＡ１ａ類が１点のみ出土している。
　　奈良橿原考古学研究所付属博物館編 1993『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』（財）由良大和古文化研究協会

【参考文献】

太宰府市教育委員会　2000　『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』
深井甚三・米原寛他　2001　『ふるさと富山歴史館』富山新聞社
藤岡了一　1990　「中国陶芸史の概要」『東洋陶磁の展開』大阪市立東洋陶磁美術館
北陸中世土器研究会　1992　『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』



第２図　富山県出土輸入陶磁器分類図

第１表　中世前期輸入陶磁器が出土した主な遺跡

遺跡名	所在地	出土遺構	特記事項
梅原胡摩堂	南砺市（旧福光町）	竪穴建物・柱穴・井戸・溝・土坑・包含層	中世には掘立柱建物 181 棟、井戸 271 基、大規模な区画溝群のほか、土壙墓、火葬炉と推定される石組遺構、土器埋納遺構等の特殊な遺構も存在する大集落で、12C 中頃～ 16C にわたり概ね北から南へと推移する。土器埋納遺構 SK2456･2464 では多数の土師器皿のほかに青磁椀・白磁皿・青白磁皿が数点ずつ出土している。遺跡周辺は、三荘十郷からなる円宗寺領石黒荘（1078 年頃成立）のうちの山田郷に属し、地方豪族石黒氏の本拠地であったとされ、当遺跡の大型建物は荘園の開発領主の居館であった可能性がある。
梅原加賀坊	南砺市（旧福光町）	溝・土坑・包含層	掘立柱建物 16 棟のほか、溝・井戸等がある。明確な区画溝はないが、建物は 2 大群 5 小群に分けられ、それぞれ 2 ～ 3 時期にわたって建て替えられる。13C ～ 14C の比較的小規模で短期の集落とされる。
在房	南砺市（旧福光町）	井戸･溝･土坑･包含層	11C 後半～ 12C 前半に掘立柱建物 5 棟、土器埋納土坑 2 基等がある。埋納土坑 SX01 では数枚ずつ重ねられた土師器椀・小皿 25 点と白磁椀の破片 1 点が出土した。
院林	南砺市	溝・包含層	遺跡周辺は、円宗寺領石黒荘のうちの院林郷に属し、地方豪族院林氏（1211 年初見～ 14C 中頃）の本拠地であったとされる。掘立柱建物の時期は 12C 後半～ 13C 中葉で、大溝は 14C 中葉を下限とすることや、硯・鉄滓等が出土したことから、院林氏に関連する村落である可能性が指摘されている。
寺家廃寺跡	南砺市	不明	12C 前半～ 13C 初頭の大溝でほぼ完形の土師器椀・皿が大量廃棄されており、祭祀儀礼行為の跡と考えられている。中世の遺構は、この他に 14C の大型土坑等がある。
北反畝	小矢部市	包含層？	12C 後半～ 14C の条里地割と掘立柱建物群があり、石清水八幡宮領埴生保 (1158 年太政官符に初見) の一画とされる。
五社	小矢部市	柱穴・溝・包含層	掘立柱建物群は 7 群に分かれ、重なりの多い群では 3 ～ 4 期に区分される。建物規模は大小あり、道路状遺構に面する建物もある。区画溝は方形に巡る部分もあるが、建物付近にない部分もある。建物時期は中世前期が主体で 12C 後半に出現し、13C には各群が揃い、14C には減少し、15C にはほぼ消滅する。室町院領糸岡荘の領域に入る可能性が高い。各建物群が数十m間隔を開けており、集落形態としては散村形態に近いとされる。
下老子笹川	高岡市	溝・包含層	方形区画に囲まれた掘立柱建物があるが、小規模なことから 14C ～ 15C 前半を古段階とする中世後期のものとされる。遺構に伴う遺物は少ないが、包含層の遺物は 13C 前半をⅠ期として 16C 後半のⅤ期まで一定量が出土している。
加納谷内	氷見市	柱穴･溝･土坑･包含層	丘陵裾から斜面にかけて、掘立柱建物・溝・井戸等がある。建物群は主軸方向から 3 群に分かれ、中世前期後半～後期初頭を古段階とし、近世まで集落が存続する。建物が出現する時期は丘陵上に木谷城が築城される時期であるが、関連性は不明。
中尾新保谷内	氷見市	井戸･溝･土坑･包含層	掘立柱建物は規模に大小があり、時期のわかるものは 13C ～ 14C が主体である。木組井戸が多く、井戸祭祀もみられる。中世後期には灌漑用の溜池が多く築造される。
中谷内	氷見市	包含層	掘立柱建物は 2 箇所に数棟ずつあり、2 時期に分かれる。遺物の年代は 12C 中頃～ 15C 前半の時期幅があるが中心は 14C 代である。
惣領野際	氷見市	溝・包含層	13C ～ 14C の条里地割と掘立柱建物・区画溝・井戸等がある。中世前半の建物には礎盤が多く残る。耳浦庄（飯尾文書 1385 年初出）に関連する可能性がある。中世後期の遺物には青磁人物像がある。
岩坪岡田島	高岡市	井戸･溝･土坑･包含層	東大寺領須加庄（東大寺領越中国諸郡荘園惣券・越中国射水郡須加開田地図 759 年初出）の比定地の一つであるが、荘園関連の遺構は確認されていない。中世の遺構としては掘立柱建物・道路・溝・井戸等があり、Ⅰ期（12C 中頃）、Ⅱ期（12C 後半～ 13C 前半）、Ⅲ期（13C 後半～ 14C 中頃）の 3 期に大きく分かれる。
井口本江	高岡市	溝・包含層	掘立柱建物・区画溝・井戸等があり、井戸から完形の折烏帽子が出土した。遺構は 12C・13C ～ 14C・16C ～ 17C の 3 時期に分かれる。13C ～ 14C に最も広範囲に展開するが、散村的な遺構配置の小集落とされている。
水上	射水市	井戸・土坑・包含層	掘立柱建物は 12C 後半～ 14C、15C の 2 時期に大きく分かれる。後期には直線的で大規模な区画溝が形成される。遺物は 13C ～ 15C 前半が主体で、種類別の構成比は珠洲が高く中世土師器が低いことから日常的な生活空間としての一般的集落とされる。隣接する大門地区は『吾妻鏡』1239 年に初見の摂関九条家領の一つ、東条保とされ、関連する可能性もある。
愛宕	射水市	溝・包含層	中世の掘立柱建物は 2 棟のみであるが、井戸は 12 基あり珠洲や折敷等の木製品が出土している。
小倉中稲	富山市（旧婦中町）	柱穴・土坑・包含層	中世の遺構としては、自然河川が埋没し土地が安定する 12C 中頃～後半に掘立柱建物が出現し、近世まで存続する。13C 初めに集落に区画溝が構築され、14C 前半には掘立柱建物に宗教関連施設と考えられる石組遺構を伴う。
道場Ⅰ	富山市（旧婦中町）	井戸･土坑･川･包含層	中世の集落はⅠ期（13C 前半～後半）、Ⅱ期（13C 末～ 14C 前半）、Ⅲ期（14C 中頃～後半）、Ⅳａ期（14C 末～ 15C 前半）、Ⅳｂ期（15C 中頃～後半）の 4 期に大きく分かれ、Ⅲ期以降大規模なＬ字状の溝等により区画される。掘立柱建物は側柱建物が多く、Ⅱ期には半地下式建物を伴う。Ⅱ期の井戸から花押のある木札が出土している。輸入陶磁器では北宋期のものは少なく、南宋・元の時代のものが多い。小破片のため実測されていないが、龍泉窯の盤や福建省の天目茶碗など一般集落ではあまりみられないものが出土している。徳大寺領宮河荘（徳大寺文書 1354 年初出）の一画とされ、建物群や大規模な区画溝、倉庫、河川施設があることから、当遺跡は荘園の物流拠点であったと考えられている。
中名Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ	富山市（旧婦中町）	土壙墓・井戸・土坑・溝・包含層	中世集落の形成期は 13C 中頃で、中世後期まで存続する。遺物は 12C のものもある。中世前期の遺構としては掘立柱建物･井戸・土壙墓・鍛冶関連遺構・区画溝・治水施設等がある。土壙墓 SZ1684 では焼骨とともに白磁の小壺が副葬される。徳大寺領宮河荘の一画とされる。
持田Ⅰ	富山市（旧婦中町）	井戸･土坑･谷･包含層	遺構は中世後期と中世末～近世の 2 時期に大きく分かれ、中世後期（14C ～ 15C）には掘立柱建物 12 棟、井戸 12 基、集石墓 5 基等がある。徳大寺宮河荘の一画にある。
南中田Ｄ	富山市	土坑・包含層	中世の掘立柱建物は 44 棟あり 3 期に分けられるが、遺物が少ないため相対的な前後関係が示されるにとどまる。掘立柱建物はⅠ期には大小あり、時期が下ると小規模なものが多くなる傾向がある。徳大寺宮河荘の一画にある。
羽根下立	富山市	土坑・川・溝・包含層	掘立柱建物はⅠ期（12C 後半～ 13C 前半）、Ⅱ期（13C 後半～ 14C）、Ⅲ期（15C ～ 16C）の 3 時期に大きく分かれる。Ⅰ期は区画溝と大小の総柱建物で構成される散村の形態で建物数は最も多い。Ⅲ期には一部が溝により方形に区画され、墓域として利用される。遺跡南方に鎮座する鵜坂神社は、式内社で建久頃（1190 ～ 1199 年）には鵜坂御厨を形成し、中世には徳大寺領宮河荘の荘官的役割を果たしたとされ、当遺跡も荘域内集落のひとつと考えられている。
友杉	富山市	柱穴･井戸･溝･土坑・包含層	古代には「家」「墾田」「馬甘（ウマカイ）」等の墨書土器が出土しているが、集落は 10C には一旦衰退する。中世では谷から 12C 末～ 13C 初頭の遺物が多く出土し、扇・祭祀具等の木製品や懸仏の鋳型も出土した。掘立柱建物は 13C ～ 14C が中心である。木棺墓には漆器を納めた折敷が副葬されていた。徳大寺宮河荘の一画にある。
任海宮田	富山市	柱穴･井戸･溝･土坑・包含層	古代には「城長」「墾田」「家成」等の墨書土器や石帯・施釉陶器・製塩土器等が出土しており、開墾集落を管理した有力者層の居住域があったとされる。中世の掘立柱建物群は一部が 12C 後半に出現し、13C に遺跡全体に広がり、14C には減少するが 15 世紀以降も存続する。中世前半の建物群は 100㎡を超す大型建物を中心に構成され、溝によって区画される。輸入陶磁は建物周辺で多く出土する傾向がみられる。徳大寺領宮河荘の一画にある。
水橋金広中馬場	富山市	柱穴･井戸･溝･土坑・包含層	集落形成は 12C 中頃～後半に開始され、13C ～ 14C を中心に展開する。掘立柱建物・区画溝・井戸等がある。古代には官道クラスの道路が通っており公的施設や白岩川との水運とも結びついていたと考えられている。
神田	中新川郡上市町	土坑・包含層	掘立柱建物群は総柱建物で大小 20 棟あり、建物配置から一時期に 3 棟程度が 6 期に渡って存在したと想定されている。群構成を保ちながら同位置に長期に渡り建て替えられているため公的性格を持つ建物群と考えられている。遺物の中心は 12C 後半で、13C のものもある。
円念寺山	中新川郡上市町	経塚	12C 後半に丘陵尾根上に造営された経塚群。集石の下に板状の石材を組み合わせた箱状または礫積みの石槨 24 基からなる。埋納主体部が完存していたのは 6 基で、ほかにも埋納品が残るものが多く、金銅製独鈷杵・銅磬・銅鏡・短刀・白磁・青白磁・珠洲経筒外容器等が出土した。3 号経塚では、合子・小壺が経筒外容器の周囲を充填する 10 ～ 15㎝大の詰め石中から出土した。8 号経塚では集石から小杯が、13 － 2 号経塚では小壺・稜花皿が出土した。
じょうべのま	下新川郡入善町	不明	平安時代の荘家跡（東大寺領丈部荘または西大寺領佐見荘）。中世には東大寺領入善庄（大治年間 1126 ～ 1131 年立庄）の一画であった可能性が高く、掘立柱建物の年代は 12C 中頃～ 13C 中頃で立荘の時期と隔たりがないことから、大型建物については荘園管理者の居住地であった可能性が高いとされる。
柳田	下新川郡朝日町	柱穴･土坑･溝･包含層	掘立柱建物は 4 ブロックに分かれ、それぞれ 2 ～ 3 棟ずつにまとまっている。溝には建物を方形に区画するもののほか、1 ブロック間を 2 条が併走するものがあり、屋敷割りを意識したものとされる。遺物は少ないが 12C 中頃～ 14C のものがある。集落の中心は 13C ～ 14C。
竹ノ内Ⅱ	下新川郡朝日町	柱穴・土坑・包含層	山裾に 9C ～ 15C にかけて営まれた集落で、中世は 12C 中頃～ 13C 初頭をⅠ期としてⅤ期まで分けられ、13C 中葉～ 14C 初頭のⅢ期が最も建物が多く、集落の栄えた時期とされる。Ⅲ期は母屋とされる総柱建物に作業場と考えられる土間が伴い、倉庫や井戸もある。遺物は普遍的な中世集落のものであるが、砥石等の出土遺物から木工・鍛冶関連の技能集団が存在した可能性があるとされる。